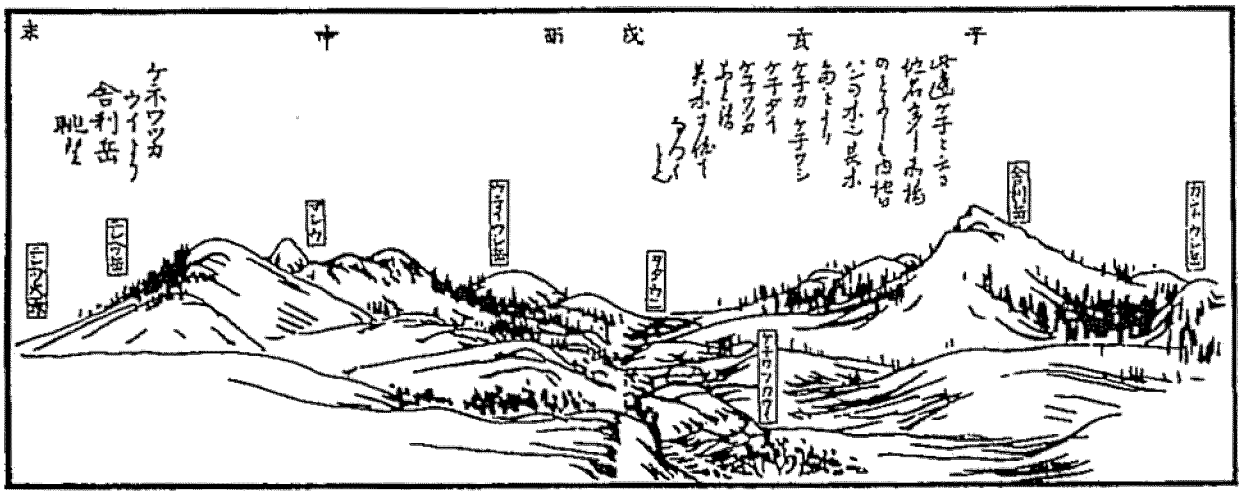
中標津町郷土館だより

発　行　平成９年４月１日
発行所　中標津町教育委員会
標津郡中標津町丸山
２丁目22番地
電 話 01537-3-3111

第11号

～古文書に出てくる中標津の風景～



【図１：『知床日誌』、丸山道子現代語訳、㈲放送アートセンター、1983年】

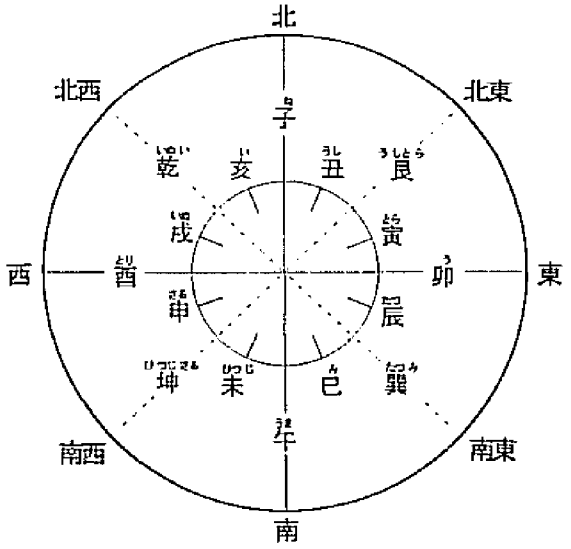
かつて中標津町内には、江戸時代から明治時代にかけて、標津川とケネカ川沿いに斜里町～標津町をつなぐ「旧斜里山道」という道がありました。

この図は北海道の名付け親でもあり、希代の探検家であった松浦武四郎（1818～1888年）が1856年（安政３年）に旧斜里山道を通った時の風景です。

図の上部には「未、申、酉、戌、亥、子」とありますが、これは十二支によって方位をあらわしたものです（図２参照）。

四角くかこまれているものは、左から「ニシヘツ火源・ニシヘツ岳＝西別岳」「マシウ＝摩周岳」「ウライウシ岳＝藻琴山」「ヲタウニ＝〔砂原のある所〕という意味の地名」「ケネワッカウイ＝〔ハンの木川の水が湧出る所〕という意味の地名」「舎利岳＝斜里岳」「カンチウシ岳＝温泉富士」のことです。

右側の文は「この辺ケネという地名多し、赤楊のことにして、内地のハンの木なり。その木多きにより、ケネカ、ケネウシ、ケネタイ、ケネワッカなど皆その木によって名づくとなり」〔楊⇨柳、ハンの木⇨ヤチハンノキ〕とあり、左には「ケネワッカウイより舎利岳眺望」と説明がついています。



【図２：方位】

旧斜里山道の道中には止宿所（宿泊所）や小休所などが数カ所あり、旅人の休憩などに使われていました。ケネワッカウイはその小休所のひとつでしたが、現在の地図をはじめ昭和、大正時代の地図にもこの地名は出てきません。調べたところ明治30年の地図に「ケネワッカオイ」という地名が記されていました（図３・４参照）。しかし、この道は明治18年に標津の伊茶仁から金山を通って斜里へ出る新しい道がつくられたため、廃止されてしまいます。その後、道中にあった地名は人々からしだいに忘れ去られていき、今となってはそれらの場所の正確な位置のほとんどが分からなくなってしまいました。

※　計根別の語源は「ケネ・ペッ＝ハンの木・川」と考えられています。

※　ハンの木は「ハンノキ」「ヤチハンノキ」のことで、文化会館周辺にたくさん生えています。

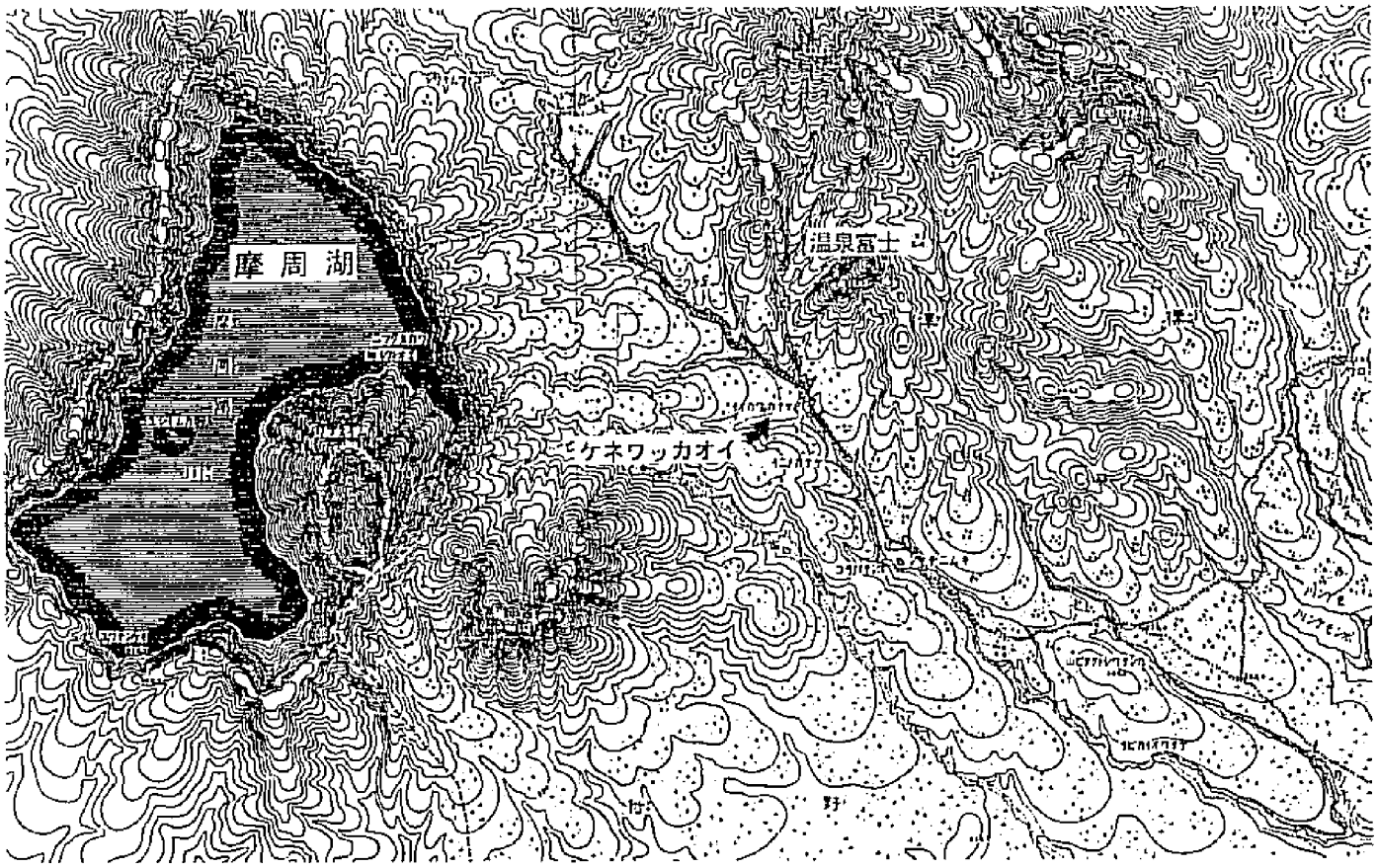
※　小休所＝休憩のために簡単な小屋があって、ござ、かめ、やかん、湯飲みなどがあったと思われます。

ところで、当時の道中はどんなようすだったのでしょうか。これについても古い記録にたびたび出てきます（日付は旧暦、文は要約したものです）。例えば……

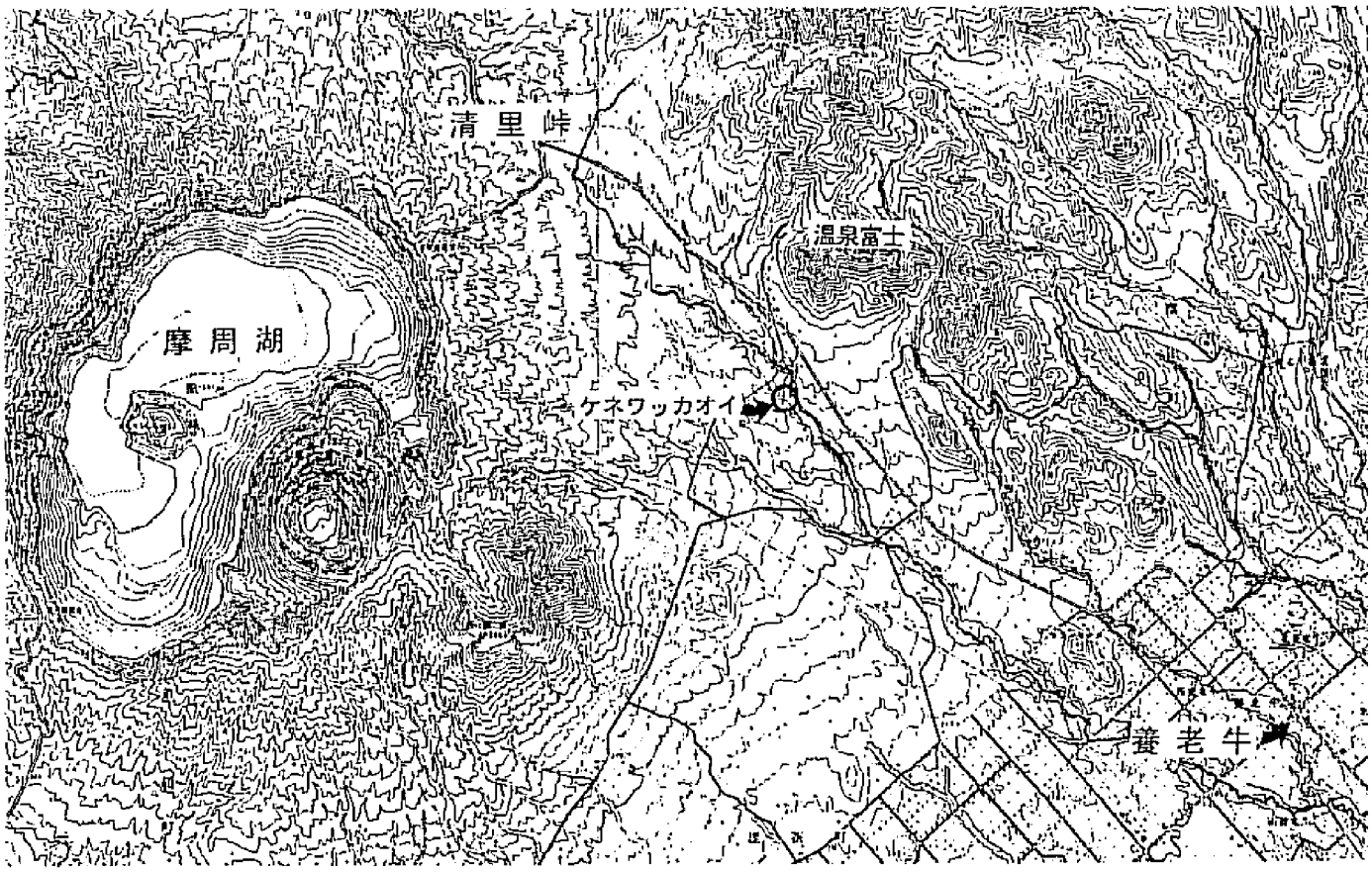
1856年９月４日、松浦武四郎が現在の清里峠付近で、「この辺トド松の木立多し。峠に登りつめると四方の山も見え、少しの雲も無い」とあります。

1857年７月２日、成石修が止宿所（宿泊所）のあったチライワタラ（現在のポンマタオチ川と標津川の合流点付近）で「ここ、ブト（ブユ？）おびただしく、家の中まで群飛し、顔や手足など肌の出ている所に付いて刺す。刺された痕は腫れるし、刺されないように服を着ると暑いため、すっかり気が減入ってしまった。ここ２～３日悩まされた虻とあまり変わらないが、憂いをなすことは10倍なり」とあります。また、1871年、松本十郎は同じ場所で「その夜、蚤があまりにも多いため随分払ったり潰したりしたが、蚤にとっては滅多にないチャンスとみえて、いくらやってもらちがあかない。腹が立ったので床板の上で毛布１枚で寝たが、やはり襲撃は止まず１晩中寝ることができず何とも迷惑であった」と記しています。この記録以外にも、現在の中標津市街から俵橋付近にかけて特に虻と蚊に関する記述が多く、当時の旅人が随分吸血虫に悩まされたようすがうかがえます。

さらに、松本十郎は標津～チライワタラまでの道を「狐や狸がいて、山犬や狼が啼き、とても文や言葉では表せない道である」とも記しています。



【図３：「大日本帝国陸地測量部、1897年（明治30年）」】



【図４：「国土地理院、1990年（平成２年）」】

中標津の山々

町内を流れる荒川上流の北進や高嶺地区の辺りからは、雌阿寒岳から武佐岳まで、四季を通じて遠望することができます。町内ではありませんが、日帰り登山が可能な山には、神秘的な青沼と荒々しい噴煙の『雌阿寒岳』、ミヤマオダマキ、チシマゼキショウ、コケモモが美しい『西別岳』、カルデラ湖摩周を眼下に半周するような『カムイヌプリ（摩周岳）』、沢登りと八つの滝が圧巻の『斜里岳』、その他にも日帰り登山が出来る道東の山に『雄阿寒岳』『藻琴山』『羅臼岳』があります。

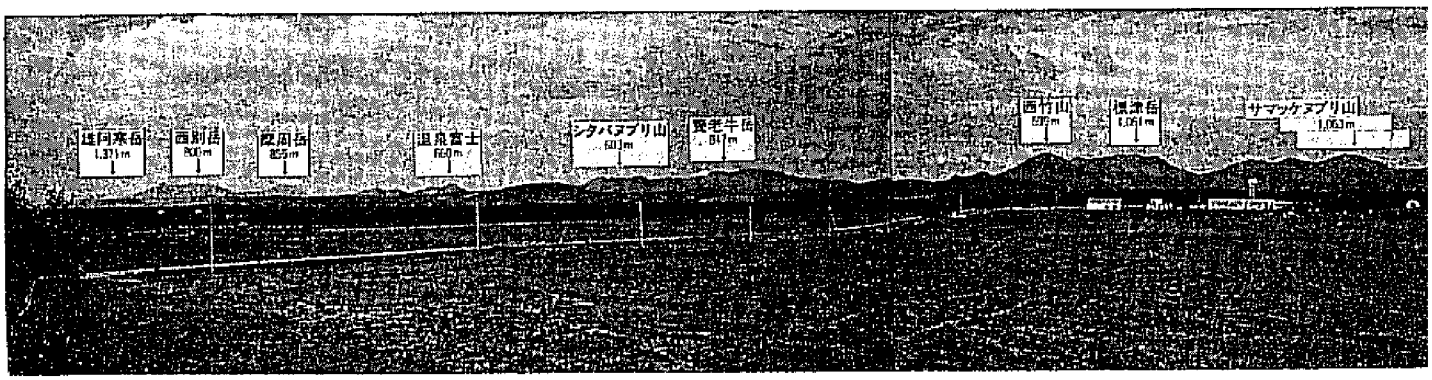
さて中標津町の山ですが、残念ながら登山道のある山は『標津岳』と『武佐岳』の２つだけです。他は登山道はありませんが、遠望ができ、踏査の記録もある山々です。

○『武佐岳』（1005.7m、標高差762m、登り２時間、下り１時間30分）

武佐岳は昭和31年に登山コースが開設されました。私が33年に登った頃は上武佐駅から歩いて憩いの沢で泊まり、翌日登山という行程でした。今は駐車場の244mが一合目になっています。なお、この山は通常の山とは違い、頂上が４合目になっています。駐車場から憩清荘までは緩い登りで、約2,6kmあります。そこから笹とダケカンバの丘陵をぬけると山容が望めることができ、急な登りになります。標高700m前後でコメツツジやハイマツが目立ちはじめ、800mの３合目に着くと阿寒の山や斜里岳も見えだし、山頂も目前となります。山頂は大きな石と地肌が剝き出しですが、360°の展望を楽しむ事ができます。晴れた日には洋上遙かに国後島の爺々岳が見えます。

○『標津岳』（1061m、標高差736m、登り２時間50分、下り２時間10分）

標津岳は昭和36年に登山道が開設されました。中標津町と清里町の町境であり、標津川の水源でもあるこの山は、山麓に養老牛温泉があり人々に親しまれています。モシベツ川沿いに林道を行くと６km程で登山口になります。しばらくは笹原とアカエゾマツの平坦な道で、さらに細い尾根の上を歩くと標高547m付近でツツジヶ丘に出ます。６月ならばエゾムラサキツツジを見ることができます。低いトドマツ林をくぐり、ここから稜線を登ると休憩に最適の清水沢があり、さらにハイマツのトンネルを進むと、コケモモやイソツツジの咲く花畑があります。山頂では阿寒から知床連山までのパノラマを満喫できます。



次の山々は登山道もなく、眺めるだけで登った事もありませんが、先人達の踏破の記録や、文献を参考に紹介しましょう。

○『温泉富士』(660m)

俣落、当幌方面からの遠望が富士山に似ている事から、この名前がつけられました。とても小さなヒメエゾムラサキツツジがあります。

○『シタバヌプリ』(603m)

パウシュベツ川沿いの俗称「裏温泉」の奥にある山で、東稜線上に小さな風穴（洞窟）があり、青コケがある。シタバはアイヌ語で禿山の意味。

○『蓑老牛岳』(847m)

営林署ではシベツ山と呼んでいたが、故西村武重氏が標津岳と紛らわしいため、蓑老牛岳と命名した。標津岳と同じく清里町との境界にある。

○『西竹山』(699m)

コメツツジやとても小さなコケモモがあります。さらに断崖の一面にはイワヒバが寄生しています。

○『サマッケヌプリ』(1063m)

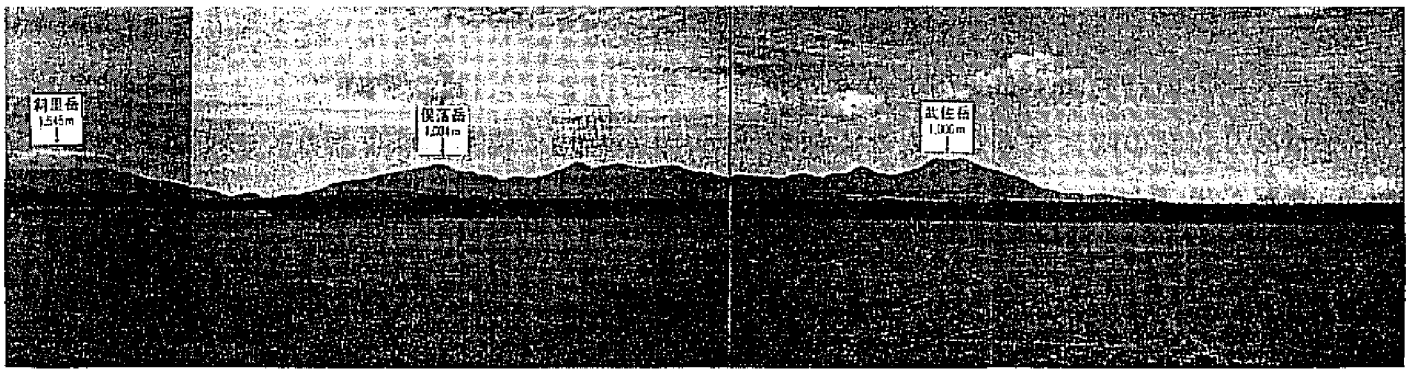
当町だけの山ではありませんが、荒川の水源である町内最大の山です。サマッキはアイヌ語で「横たわっている」の意味です。

○『ソーキップ岳』(1043m)

この山は昭和2年に故西村武重氏等が武佐硫黄山を発見した当時に命名されました。その後、地図に記載がありませんが、標津との境界で俣落岳と武佐岳の中間辺りにある1021mの山がそれかと思われます。他にも低山ながら『カンジウシ山(277m)』『モアン山(356m)が』あり、また、地図上に山名の記載はないものの、600～700m の山々が7つ以上あります。これら登山道は勿論、正式な名前もない山を含めると、当町の山々はなかなか数が多いのです。アウトドアブームの昨今、家族連れや若者、中高年までの健康的なレクの為にも、中標津町の山々が一日も早く名実ともに整備され、多くの人々に愛好される事を願っています。　　（中標津町史料室　きくち　せい）

～参考文献～

・中標津町史・蓑老牛の今昔・中標津町管内図・夏山ガイド



中標津町内で見られる蝶（8）

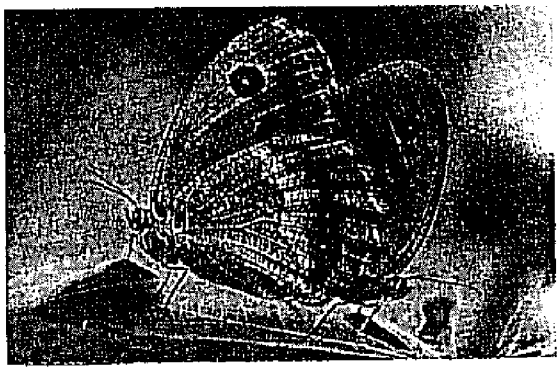
・ジャノメチョウ（ジャノメチョウ科）

7～9月頃、日当たりの良い草原や牧草畑、川原や道路沿いなどで目にすることができます。分布は全道と広いのですが、あまり高い場所では見られません。

食事は草原性の花の蜜を吸うことが多いのですが、樹液や熟した果実も吸うようです。母親である蝶は草の中にもぐり込み、あちこち歩きまわります。そして時おり葉の上などで止まると卵を地表に産み落とします。

卵からかえった幼虫はそのまま冬を越し、やがてサナギになりますが、他の物に付かずに、地表のくぼんだ所にころがるようにして発見されます。

幼虫の食事はススキなどのイネ科、カヤツリグサ科。成虫はタンポポやツメクサ類などの草原でみられる多種の花々です。



【交尾中のジャノメチョウ】

～参考文献～

・『北海道の蝶』、北海道新聞社、1986

・『野外ハンドブック2・蝶』

山と渓谷社

！道東地方のアイヌ伝説！

「標津町の金山(かなやま)伝説」

標津町から斜里町へ向かう国道244号線の途中、金山という地名があります。もともとこの道路は根室と北見をつなぐ重要な道路で、享和元年（1801年）に白糠へ移住していた八王子千人同心によって開さくされたものです。明治18年（1885年）から本格的に利用されるようになったのですが、この伝説は故西村武重氏が大正7、8年頃、留辺斯駅逓所でラウシという老アイヌから聞いた話ですから、道路ができるよりずっと前のことのようです。

その昔、といってもそれはずっと大昔のことです。立派なチャシ（砦）をもつ金山には、ヨコウシという莫大な資産を持つ村長がいました。

それはヨコウシの生まれるずっと前のこと、ある年の夏に忠類川の水が涸れたため、さしもの大滝も底が現れることがありました。するとそこから金塊がぞくぞくと現れたのです。このことを知った各国のアイヌは隙あらばこれを奪わんと狙っていましたが、堅固なチャシに立てこもる金山には、長い間誰も手がだせないでいました。この先祖の莫大な資産と堅固なチャシは金山の存在と価値をいやがうえにも高くしていたのです。

そのヨコウシにはソキリニという一人娘がいました。北見、十勝、釧路、根室界隈きっての美人と評判が高く、あちこちから婚姻の話が持ち込まれていました。ところが、いつも金山の資産を狙っていた北見の村長サツリーの息子ウットロが、この娘に

すっかり惚れ込んでしまいました。サツリー親子は何度も結婚を申し込みましたが、ヨコウシはこの親子の下心を見抜いていたので相手にせず、聞き流していました。しかし、そんなことではあきらめないこの親子は虎視眈々と金山の隙を狙っていました。

やがて、ソキリニは以前から恋仲であった茶志骨村長の次男ワッカオイと結ばれることになりました。その結婚式のためヨコウシと一族郎党が茶志骨へと向かったことを知ったサツリー親子は好機到来とばかり国境を越え、金山へと攻めこんできました。金山の見張りは急いでヨコウシに知らせましたが、戦える者はみなこの行列に加わっていたので、村には老人と女子供しかいませんでした。

ヨコウシは覚悟を決めました。行列をこのまま続けさせ、自分は砦へ引き返したのです。金山へ戻ったヨコウシはまず老人と女子供をソーケショマナイ川の奥へと逃がし、そして極秘のうちに金塊を金山の滝の底に沈めました。その仕事が終わったとき、チャシは北見勢の大軍にすっかり囲まれていました。

【イラスト：佐瀬乃布子】

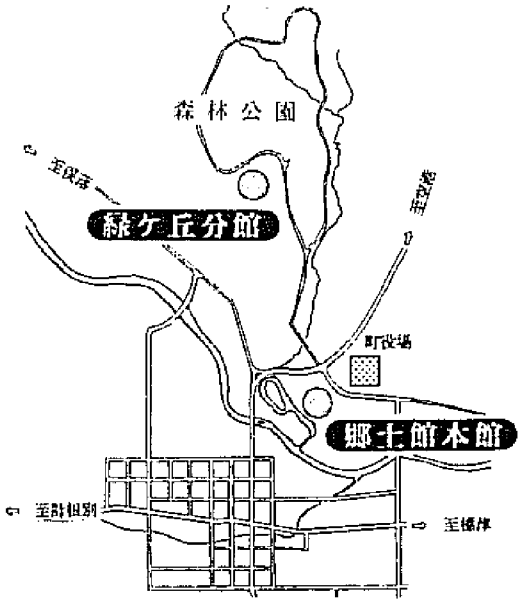
チャシを囲む大軍を見てヨコウシはニッコリ笑っていました。「この財宝のカギを解くには『朝日さす・夕日さす』ということばを知らなければならない。それを知らずに攻め込んできてもなにになるだろう。」やがて、ヨコウシは自らチャシに火を放ちました。空高く舞い上がる火柱。樹海に広がる黒煙の中にヨコウシの姿は消えていきました。

こうして、金山の滝壷から発見された金塊は、また元の滝壷へとかえっていったのですが、この戦が終わって数百年。いまだに金塊の隠し場所は謎のままだそうです。

（1968年『標津町史』、1969年『根室百話』より要約）

【中標津町郷土館及び分館案内図】

――編集後記――

「郷土館だより」も発行から5年、号数も2桁になりました。そこで今までの「だより」を重ねて厚さを測ってみるとピッタリ5mmう～ん1年に1mm．．．

お忙しい中、原稿をお寄せ頂いた皆様にお礼申し上げます（山宮記）